大阪樟蔭女子大学論集第 40 号（2003）

独白・傍白－シェイクスピアの語り（2）

鳥　井　　清

［悪人の本音］

シェイクスピアの独白には、主役以外の登場人物に独白を語らせる場合がある。すなわち、観客を信頼の置ける相手とみなして、敵役あるいは悪の主人公が自らの心情や本音を吐露するケースである。たとえば『リチャード 3 世』（*King Richard* Ⅲ）では、自分の異形の容姿と、その異形ゆえに持ち前の鋭敏な才知が報われない運命の不遇とにより、悪に徹して生き抜こうとするグロスター公リチャード（Richard, Duke of Gloucester）の開幕冒頭の台詞がその典型である。

今やわれわれの不平、不満の冬は、
このヨークの太陽のお蔭で、さん然たる栄光の夏となった。
そしてわれわれの家の上に垂れこめていた全ての暗雲は、
大洋の深いふところの中へ葬られてしまった。
今やわれわれの額は勝利の花環で飾り立てられている。
われわれの破損した武器は記念品として陳列されている。
けたたましい戦闘準備の合図は楽しい人寄せの声となった。
壮絶な突撃前進は、心地よいダンスのステップに変わってしまった。
いかつい顔の「戦争」は顔のしわをすっかり伸ばしてしまった。
そして今や完全武装をした馬に歩武堂々と跨がって、
腰抜けの敵兵どもの心胆を寒からしめる代わりに、
いい具合に情欲をかき立てる淫らな楽の音に合わせて、
奴めは女の部屋でいとも敏捷に立ち回っている。
ところがこの俺は、やさごとには生まれつき向いていないし、
自惚れ鏡にうつつをぬかすようにもできてはいない。
この俺は、下手くそな刻印を押された出来損ないの貨幣（コイン）だから、
流し目で品を作って歩く女の前にしゃしゃり出る度胸がない。
この俺は、空っとぼけの「自然」の女神にだまされて、
こんなことに必要な五体の均整が切り取られてしまったという訳だ。
かたわで、未完成で、月足らずのまま、
ほとんど半分も出来上がらぬうちにこの世の空気を吸わされた。
こんなにちんばで、およそ浮世ばなれの恰好だから、
俺がびっこをひきひき傍を通ると、犬の奴めはおれに吠えかかる。

つまりこの俺には、こんな笛や太鼓の平和で軟弱な時には、
日向で己の影法師でも眺めて、
その不様な恰好をあれこれ歌う以外には、
おもしろおかしく暇をつぶす方法はない。
だから、この俺が色男になってこの巧言令色の軟弱な時代を、
楽しく暮らすようには絶対になれっこはないのだから、
俺は決心した、いっそのこと大悪党になってやるのだ。
そしてこの頃のあのつまらぬ楽しみを呪ってやるのだ。
計画はもう動き出している。でたらめな予言や、
悪口を書いたビラや、夢占いで、恐ろしい序の幕はもう切って落とされている。
兄王エドワードと次兄クラレンスとが、
お互い不倶戴天の憎悪を抱くようたばかってやるのだ。
俺が陰険で嘘つきで裏切り者であるのにひきかえて、
兄王エドワードはまじめで正直者だから、間違いなく今頃は、
頭文字のつく者がエドワードの跡継ぎを殺すだろうという、
俺の作ったあのでたらめな予言の件で、
次兄のクラレンスが冷たい牢屋に繋がれているだろう。
待て、いろいろの思いごとは心の底に潜っていろ。クラレンスがやって来る[1]。

イングランドの王位継承の内乱はヨーク家の不遇のうちに終始してきたが、今ようやく時来たり、ヨーク家系の国王エドワード4世の治世となって、「不平不満の冬」が立ち去り、我が世を謳歌する「栄光の夏」を迎えたとヨーク系のグロスター公リチャードが開幕冒頭で述懐する。しかし楽しかるべきその栄華の時代も、不具の身であるリチャードにとっては何一つ心和ませるものがない。「自然の女神」の失敗作である自分は、それ故に「決心して」「陰険で嘘つきで裏切り者」の「大悪党となり」、長兄エドワード王（King Edward Ⅳ）と次兄クラレンス公（Duke of Clarence）というもっとも身近な実の兄弟を互いに反目対立させる「計画」を企て、それが既に着々と進行しているとうそぶくのである。血が血を呼ぶ殺戮劇の開幕を告げるこの独白は、極悪非道の主人公が本音を洩らす決定的瞬間でもある。

『ジュリアス・シーザー』（*Julius Caesar*）では、シーザー（Caesar）暗殺をもくろむキャシアス（Cassius）が、ローマ市民の信頼度の高いブルータス（Brutus）を一味に引き入れるべく画策した彼の最初の説得が奏功し、自分たちの企てが有利に展開することを確信し、退場するブルータスの後ろ姿を眺めながら第二の術策を洩らす台詞となる。

なるほど、ブルータス、君は高潔だ。だが、
君のその立派な精神といえども、それが本来持っている性質と
まったく反対の方向に向けられるかもしれない。だから高潔な人間は、

同じように高潔な人間と共にあることがふさわしいのだ。
どんなに確固とした精神を持っていても、誘惑されないとは限らないのだ。
シーザーはおれをよく思っていない。しかし彼はブルータスを愛している。
もしおれがブルータスで、あいつがキャシアスだったら、
あいつはこんなおれを動かすことは出来ない。そうだ、
今晩、いろいろな筆跡で手紙を書いて、あいつの窓に投げ込んでやろう。
いかにもその手紙がそれぞれ別の市民から来たように見せかけて。
そしてその手紙には、ローマの市民たちがいかにブルータスという名を
深く信頼しているかというような事を書いておこう。
そしてその手紙に、シーザーの野心をそれとなく分からせるように書こう。
それでもなお、シーザーがその地位に安泰でいられるかどうかみるがよい。
シーザーをゆさぶり倒してやる。さもないともっと惨めな目に会うのだ[2]。

高潔で正義の人ブルータスの弱点を充分理解した上で、その彼の弱点を突こうとする策略をキャシアスは呟く。いかに「高潔な人間」であっても「誘惑されない」と断言することはできない。いろいろと「筆跡」を代えたブルータス待望論の手紙を投げ込み、ローマ市民の支持がいかに熱烈であるかを偽装して、ブルータスの洗脳－すなわちシーザー暗殺への加担－を図っている。「もしおれがブルータスで、あいつがキャシアスだったら、あいつはこんなおれを動かすことは出来ない。」説得者と被説得者の立場を入れ換えたとき、説得の対象であるブルータスとしての自分は、今のブルータスを動かそうとするキャシアスなどの策略には決して乗ぜられるものではないという強い自意識の表明である。つまり、アジテイターとしてのキャシアスにとっては、高潔の士を籠絡するのはいとも簡単なことという宣言でもある。このフレーズは、後年の悲劇『オセロー』(*Othello*) において、極悪人イアーゴー (Iago) の台詞において再度使用されるという点で重要である[3]。

[独り歩きする台詞]

(1) To be, or not to be, that is the question : (*Hamlet*, Ⅲ. i. 56)

これは余りにも有名なハムレット (Hamlet) の、いわゆる第 3 独白である。イギリス人の聴覚に最も心地よい響きをもたらす弱強 5 歩格 (iambic pentameter) の無韻詩 (blank verse) である。英語の Be 動詞には、二通りの意味がある。① God *is* in heaven. におけるような「存在」を表す完全自動詞の場合と、② He *is* kind. のような状態を表す「不完全自動詞」の場合とがある。従って ① での To be の意味は、「存在すること ⇨ この世に在ること ⇨ 生きること」を表し、not to be は「存在しないこと ⇨ 生きてはいないこと ⇨ 死ぬこと」を表す。一方 ② の意味では、To be は「今ある状態 ⇨ 現在の状態であること」を表し、not to be は「今の状態ではないこと ⇨ 今とは違う状態であること」を表す。

これは、シェイクスピアが彼の作品中でよく使う手で、最初は重要な独白を曖昧に、一般的な意味で述べる。そして、それに続く台詞で、具体的にその内容を示すのである。そこでハムレットの第3独白の冒頭 'to be, or not to be, that is the question' に続く台詞は、

どちらが立派な生き方か、このまま心のうちに
暴虐な運命の矢弾をじっと耐え忍ぶことか、
それとも寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、
闘ってそれに終止符をうつことか[4]。

である。具体的には、to be とは「運 命に耐えて生きること」であり、not to be とは「運命と戦う人間の避けがたい死」であることが分かる。to be とはすなわち 'to suffer／The slings and arrows of outrageous fortune'（暴虐な運命の矢弾をじっと耐え忍ぶこと）であり、not to be とは 'to take arms against a sea of troubles／And by opposing end them'（寄せくる怒濤の苦難に敢然と立ちむかい、／闘ってそれに終止符をうつこと）になる。従来からの解釈では、to be を「生きること」、not to be を「死ぬこと」と理解するが、それに加えて河合祥一郎の見解[5]を援用してもう少し敷衍してみると、to be を「生きるという辛い状況にあって、じっと耐え忍ぶくこと」と解し、「忍ぶ」とは「苦しみ耐えながら、そのままでいること。この世にとどまること。在ること」である。これに対して、もう一方の not to be は、「生きていけば必ず出てくる苦しみや苦悩に対して、『もう耐えられない』と見切りをつけ、それを終にすべく立ち上がること」になる。「人生の苦悩を終にするということは、人生を終にすること」であり、それ故に not to be は「存在しないこと」を意味すると解されるのである。

現状維持か、それとも現状打破かの岐路にあるのだが、「それが問題だ」と表現することにより、さまざまな思案の末に到達した結論が、ハムレットには「決断できない状況にいること」だというのである。

(2) to be の受容について（ヨーロッパと日本と）[6]

To be の受容論を展開するに当り、拙稿は限られた資料での言及となることを先ず断っておかなければならない。前掲の 'To be, or not to be, that is the question' をヨーロッパでほどの様に受容しているのであろうか。筆者の乏しい外国語の知識を用いて、ドイツ語およびフランス語について考察を試みる。ドイツ語およびフランス語による逐語訳は次のようなものとなるであろう。一説によれば、① は Goethe, ② は Victor Hugo の訳出になるものという。

① ドイツ語訳　：Sein, oder nicht sein, das ist die Frage.
② フランス語訳：Etre, ou ne pas être, voilà la question.

ドイツ語の sein, フランス語の être はいずれも、英語の to be と同じ機能と意味とを併せ持つ

動詞である。sein も être も共に、「存在する」という意味と、状態を表す「〜である」という意味とを同時に併せ持っている。従って、それぞれの訳文から推定して、日本語訳におけるような苦心や苦労は存在しないと言ってもいいのではないかと思われる。ドイツ人もフランス人も共に、英米人が理解するのと全く同様に、少なくとも母国語で to be, or not to be が理解できるのである。Indo-European languages という同語族系言語の強みというべきかも知れない。

ところが日本語の場合、to be に対応する「存在する」と「〜である」とでは、単語も語形も意味もまったく異なるのである。それ故に、ドイツ語、フランス語の翻訳の場合と比べて、かなりな翻訳上の困難がつきまとう。すなわち to be が担う二つの意義の中、いずれか一方を無視して訳出せざるを得ないのである。従って、わが日本におけるハムレットの第 3 独白の受容の歴史は、異言語体系間に起因する翻訳の葛藤の歴史と言い換えても決して過言ではないであろう。

(3) 第 3 独白の受容史

手許の資料で、わが国における受容の歴史の概要を辿ってみることにしよう。

1. 明治 7 (1874) 年　イギリス人記者 Charles Wirgman が 'Yellow Yokohama Punch' 紙上に発表したものを以って本邦初訳の嚆矢とするが、ローマ字表記で、しかも稚拙な翻訳であった。従って日本人の手になる最初の翻訳は、それから 8 年後まで待たねばならないのである。

Arimas, arimasen, are wa nan-deska.
(アリマス、アリマセン、アレハナンデスカ)

2. 明治 15 (1882) 年　矢田部良吉 『新体詩抄』
ながらふべきか、但し又　ながらふべきに非ざるか
爰(ここ)が思案のしどころぞ

3. 明治 27 (1894) 年　岩野泡鳴 『魂迷月中刃(たましい．げっちゅうのやいばにまよう)』
死のか死のまいか、－思案

4. 明治 38 (1905) 年　戸澤姑射(正保)『沙翁全集　ハムレット』
定め難きは生死の分別

5. 昭和　8 (1933) 年　坪内逍遙 『新修シェークスピア全集』
世に在る、世に在らぬ、それが疑問じゃ

6. 昭和 24 (1949) 年　市河三喜・松浦嘉一　『ハムレット』(岩波文庫)
生きるか、死ぬか、そこが問題なのだ

7. 昭和 30 (1955) 年　福田恆存 『シェイクスピア全集 5』(河出書房)
生か、死か、それが疑問だ

8. 昭和 42 (1967) 年　大山俊一 『ハムレット』(旺文社文庫)
在るか、それとも在らぬか、それが問題だ

9. 昭和 43（1968）年　小津次郎 『世界文学全集 1』（筑摩書房）

やる、やらぬ、それが問題だ

10. 昭和 44（1969）年　氷川玲二 『デュエット版世界文学全集 1』（集英社）

生きるのか、生きないのか、問題はそこだ

11. 昭和 45（1970）年　木下順二 『世界文学全集 1』（講談社）

生さ続ける、生き続けない、それがむずかしいところだ

12. 昭和 48（1973）年　小田島雄志 『シェイクスピア全集 1』（白水社）

このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ

13. 昭和 61（1986）年　安西徹雄 『シェイクスピア劇の名台詞』（講談社学術文庫）

あるべきか、あるべきでないのか、問題はそれだ

14. 平成　8（1996）年　松岡和子 『シェイクスピア全集 1』（ちくま文庫）

生きてとどまるか、消えてなくなるか、それが問題だ

以上見てきたように、英語の Be 動詞が含んでいる力強い単音節の語（monosyllable）to be と、語義で二重の意味を包含する to be とを、発音と意味との両面において、一語で表現出来ないところに日本語による翻訳の限界があるように思われる。また、Be 動詞の意味の一半を汲んで、to be を「生存」の意味とし、not to be を「死」と取るのか、あるいは to be を「行動を起こす」とし、not to be を「行動を起こさぬ」と訳出するのか。さらにまた、「このままでいい」のか「いけない」のか。あるいは、the question を「疑問」と解するのか、それとも「問題」と理解するのか。はたまた「問題は〜だ」の文体が適切なものであるのか？ 甲論乙駁、百家争鳴の歴史はとどまるところを知らない。劇のシチュエイションから切り離して独り歩きする To be, or not to be は、まさに「問題」である。筆者の立場は、先に分析したように、第 3 独白全体を見渡すとき、現状維持のままで時節を待つのがいいのか、座して死ぬよりは敢然と行動を起こして、しかるのち止むの気構えで臨むのかという両極端に揺れるハムレットの意識を重く見て、「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」にやや傾きかけている。

［Hamlet の独白　その心情の変化］

主人公の独白は、エリザベス朝の作劇術が高度にその機能を発展させた技法（technique）といえる。ここではハムレットを通して登場人物の内面の思いに耳を傾けることにしよう。

〔傷心の告白〕（第 1 独白）

ああ、このあまりにも固い肉体が融けて、／流れて、露になってしまえばいい！／さもなければ永遠の神の掟が／自殺を禁じてさえいなければ！　おお、神よ、神よ！／この世の営みのすべてが／なんと物憂く、陳腐、平板、無価値な物に思えることか。／忌まわしい。忌まわしいぞ！　雑草の茂るにまかせて、／朽ちかけた庭もさながら。自然のうちなる粗野にし

て野卑なる物に／ことごとく覆いつくされ。こんなことになろうとは！／死んでからほんのふた月－いや、まだふた月にもなっていない。／あれほど優れた王が、それを、今に較べれば、／日の神と半獣のサチュロスではないか。あれほどにも母を愛し、／天上から吹く風があまりに激しく母の顔に吹きつけるのさえ／許そうとはしなかったものを。なんということ！／思い出さねばならぬのか？／母は父上に取りすがり、／あたかも食べれば食べるほど／食欲が増すかのようではなかったか。それなのに、僅かひと月－／もう考えるな。脆いものよ、お前の名は女。／僅かひと月。あわれな父上の亡骸に付添い、／ニオベのように泣き崩れて墓へ歩んだ／あの靴さえまだ新しいというのに、それを、それが－／おお神よ！　理性の働きを持たぬ獣でも／もう暫くは嘆いた筈だ。それを、結婚した、叔父と！／父上の弟、だが父上とは似ても似つかぬ。／おれがヘラクレスに似ぬのにも劣らぬ。たったひと月、／たとえどれほど真実のない涙であろうと、／泣きはらした目はまだ赤く爛れているはず、なのに／結婚した。なんと浅ましい急ぎようか、／あれほどいそいそと不倫の臥床（ふしど）に駆けてゆくとは！／よからぬことだ。よい結末の生まれるはずもないことだ。／だが、たとえこの心臓が破れようと、口を閉ざしていなくてはならぬ[7]。

〔1 幕 2 場〕

理想の夫婦として日頃敬愛していた両親だった。それなのに、父の死後まだ日も浅い中に再婚した母、ハムレットにはふた月、いやひと月も経っていないと思われるほどの短い期間に、しかも再婚の相手が事もあろうに人格卑しい父の弟とは。純粋なハムレットの心には、二人の再婚が近親相姦に見える[8]。淫蕩な母と同じ血が自分の身体の中を駆け巡っている。青年ハムレットには耐えがたい屈辱であり、彼はこの世に生きる価値を見失い、自殺を希う。だが神の掟はそれを許さない。彼は悲痛な叫びをあげる。「脆いものよ、お前の名は女（Frailty, thy name is woman.）」[9] デンマークの宮廷内は、新国王の結婚で華やいだ雰囲気に包まれている。ここに引用した第 1 独白にあるように、心の葛藤にふさわしく、ただ一人ハムレットだけが黒の喪服に身を包んで、異様に沈んでみえる。ハムレットが異様なのか、それともデンマークの宮廷が異常なのか？

〔To be の問題〕（第 3 独白）

あるべきか、あるべきでないのか、問題はそれだ。／どちらが立派な生き方か、このまま心のうちに／暴虐な運命の矢弾にじっと耐え忍ぶことか、／それとも海のように果てしない艱難に斬りかかり、／戦うことで終にしてしまうことか。死ぬ、眠る、／それだけのこと。もし眠ることによって、／生まれながらに肉体につきまとう百千の／心労と苦痛を終わらせることができるとしたら、／これほど望ましい終局はないではないか。死ぬ、眠る、／眠って、夢を見るかもしれぬ。そうか、そこに躓きがあるのか。／その死の眠りのなかで、この世の苦しみを脱ぎ捨てた時、／どんな夢が来るかも知れぬ。／それを思えばつい立ち止まってしまうのだ。だからこそ／これほどにも長く苦難を耐え忍ばざるをえないのだ。／さもなくば

誰がこの世の苦痛と恥辱を忍ぼう。／圧政者の不正、傲慢な男の振う暴虐、／蔑まれた愛の悲しみ、裁判の遅延、／役人どもの横暴、そして、忍耐強い賢者が／下らぬ者から受ける侮蔑を誰が忍ぼう、／ただ抜き身の短剣をひと突きすれば、／みずから一切の決着をつけることが出来るというのに。／重荷を背負って辛いこの世に血の汗を流すというのも、／ただ死後に来る何かを怖れ、／その境を越えれば誰一人旅人の帰ってくることもない／未知の国を怖れて意志も挫け、／現に嘗めている苦しみに耐えるほうが、／正体も分からぬ苦しみに飛び込むよりはまだしもと考えるのだ。／こうして意識という奴がわれわれ皆を臆病にする。／そして決意の健康な血色も／思考の蒼ざめた色に覆いつくされ、／いかに重大、緊要の大事業も、／これを思えば本来の流れを変えて、／ついに行動とはなりえずに終わってしまうのだ[10]。

〔3 幕 1 場〕

ハムレットといえば、直ちに話題にされるほどに余りにも有名な独白がこれである。最初の 1 行は「あるべきか、あるべきでないのか、問題はそれだ」という安西の訳文を使ってみた。第 1 独白では、ハムレットは自分のことと共に、父、母、叔父について語っている。ところがこの第 3 独白では、父の死も、母への怒りも、叔父に対する復讐すらも、一言の言及もない。1 幕 4 場で出会った亡霊のことすらも意に介している風にない。そのことは、彼が死のことを「その境を越えれば誰一人旅人の帰ってくることのない未知の国」と素っ気なく無造作に語っていることで分かる。亡霊こそは、その「未知の国」から一時的にせよ帰ってきた旅人であり、その旅人に問い質せば、死後の世界に対するわれわれの不安も解消するであろうのに。このように見てくると、ハムレットは自己矛盾を問題にしているのではないことに気付く。「人は何故に死ぬことを恐れ、辛い苦難の充満するこの世界に執着し続けるのであるか？」彼は、不公正で苦しみの多いこちらの世界にあって、生き続けなければならない人間存在という普遍的な問題に没頭しているのである。生か死か、いまだ逡巡して決断が着かない状況が、多くの言葉を費やすことによって明らかとなる。

さて舞台に戻って状況を考えてみる。第 3 独白は、ある意味では危険な「自己意識の表白」ではないのか。ハムレットの眼前にはオフィーリア（Ophelia）がおり、背後の物陰には国王のクローディアス（King Claudius）と宰相ポローニアス（Polonius）とが聞き耳を立てている。国王たちのスパイ作戦が奏功するのか、はたまたハムレットが狂人の真似を続けて、復讐の本心を隠し通せるのか？　ハムレットの独白が、単純な現実主義者のポローニアスにも、またハムレットの行動に胡散臭さを感じているクローディアス王にも理解しがたい言葉に聞こえる。「お前の父ほどこにいる？」と不意にオフィーリアに問いかけて、敵方の心胆を寒からしめたハムレットの佯狂振りは、安泰であったというべきであろう。

〔人間とは〕

国王から派遣されたスパイと知った上で、旧友ローゼンクランツとギルデンスターンに語りか

けるハムレット。

近頃、なぜか自分にも分からないが、私は楽しみを全く失い、以前はよくやっていた運動も止めてしまった。実際、心が重く沈み込んで、見事な作りのこの大地も荒涼たる岬としか思えない。あの素晴らしい天蓋たる大空、頭上を覆うあの雄大な蒼穹（そうきゅう）、燦然たる星々を散りばめたあの壮麗な天上も、なんのことはない、ただ毒気を含んだ忌わしい雲の塊としか見えぬのだ。人間とはなんという傑作！　理性は気高く、感覚、表情、動作において無限に変化し、行動は適切、賛嘆に値し、知性においてはいかに天使にも似て、なんと神にも似た存在であることか！　世界の花だ。まさしく万物の霊長！　だが私には、ただの塵の精粋であるに過ぎぬ。人間を見ても私の心は楽しまぬ[11]。

〔4 幕 4 場〕

「人間とはなんという傑作！」から「知性においてはいかに天使にも似て、なんと神にも似た存在であることか！　世界の花だ。まさしく万物の霊長！」までは、ルネッサンス前期の人間讃歌である。楽観的な人間観とでもいえようか。しかし、最後の 1 文が気にかかる。かつては天地の間のあらゆる被造物、とりわけ人間を大いに賛嘆した。しかし今は、大地も「荒涼たる岬」となり、大空も「ただ毒気を含んだ忌わしい雲の塊」と見えて、人間も「ただの塵の精粋であるに過ぎぬ」という。ローゼンクランツとギルデンスターンには、ハムレットの心の悩みなど到底理解できない。王子のこの告白すらも、彼らには王子の狂気の言動と聞こえたことであろう。

〔復讐の停滞　自己叱責〕

目に触れる物ことごとくが私を非難し、鈍った復讐の念を揺り醒ます！／人間とは何者か。／もしも生涯を費やして得るものが、ただ眠って食らうことでしかないとすれば、獣と変わらぬ。／神が人間にこれほど大きな推論の力を与え、／前を見、後ろを振り返る力を与え、／神にも似た理性の能力を賦与し給うたのは、／役にも立てず腐らせるためではないはず[12]。

〔4 幕 4 場〕

ハムレットは復讐の遅延に苛立っている。ノルウェーのフォーティンブラスが、猫の額ほどの小さな領土を取り戻すために、ポーランド侵攻に向かう軍勢を引き連れてデンマーク領内を通過する。それを偶然目撃したハムレットは、フォーティンブラスの積極果敢な行動力に比べて自分の日常を省みる。ハムレットはただ思い悩むばかりで、いわばただ眠っているだけの生活である。これでは獣と何ら変わるところはない。造り主の期待にも応えるべしと自分を叱咤激励している独白なのである。

〔神の摂理〕

国王クローディアスの使者が、オフィーリアの兄レアティーズとのフェンシングの御前試合を

伝えに来る。気の進まぬ様子のハムレットを見て、親友のホレイショーは御前試合の辞退を進言する。だがハムレットはその進言を退けて言う。

> 前兆などというものを気に掛ける手はない。一羽の雀が落ちるのも神の摂理。来るべきものは、今来なくても、必ず来る－いま来れば、後には来ない－後に来なければ、今来るだけのこと－肝心なのは覚悟だ。いつ死んだらいいのか、そんなことは考えてみたところで、誰にも分かりはしない。所詮、あなたまかせさ[13]。
>
> 〔5 幕 2 場〕

劇の終幕近く、復讐の機会はハムレット自身にも未だ見通しが立たない。不本意な御前試合など、復讐に賭けるハムレットにとっては無益で無意味なイヴェントである筈である。しかし、あれほど復讐に思い悩んだ情念がいまは不思議に跡形もなく消えて、心境は清澄な状態に保たれている。復讐の時期など「今来なくても、必ず来る－いま来れば、後には来ない－後に来なければ、今来るだけのこと」。手ぐすね引いて待ち構えるのは愚策－無駄な努力はするべきではない。心静かにその機会の到来を待てば、必ず念願は達成されるという確信。「肝心なのは覚悟だ。」不思議に静澄なハムレットの心境が、彼を御前試合へと向かわせる。果たして彼の運命はいかに展開するのであろうか。

〔語りの最後は〕

クローディアス王とレアティーズとの間で密かに練り上げられた御前試合の陰謀。毒杯と試合用の剣に仕込まれた毒液の仕掛けが、ハムレットの眼前で平常とかわらぬ状況を装って展開される。勝利者のために用意された玉杯には、猛毒を仕込んだ真珠が国王自らの手で投げ入れられ、切っ先の尖った未修正の剣がレアティーズの手に渡される。企みがあるなどとは一切疑わぬハムレットは、試合開始に備えている。いよいよ御前試合の開始。3 本勝負は 2 本までハムレットが先取した。焦りのために功を急いだレアティーズは、休憩中のハムレットの不意を突いて腕に傷を負わせる。出血により素早く事情を察知したハムレットは、彼の剣を奪い、その剣でレアティーズを刺す。件の剣の切っ先に塗られた毒が、半時間後には二人の生命を奪うとレアティーズは真実を暴露する。企みなど露ほども知らず、王子の勝利を愛でて毒入りの祝杯を干した王妃ガートルード（Gertrude）は、間もなく絶命。国王の陰謀が明らかにされ、ハムレットの剣が王の巨体を刺し貫き、母の飲み残した毒入りのワインがクローディアスの口に注ぎ込まれて、国王はたちどころに絶命。このハプニングがハムレットにとっては予想外の成り行きとなり、ついに復讐が成立するのである。

> 後に来なければ、今来るだけのこと

ハムレットの復讐の機会は、彼の言葉通りになった。介添人の親友ホレイショーに見守られなが

ら、苦しい息の下で「デンマークの王位はノルウエーの王子フォーティンブラスに譲る」ことを託した後、万感の思いを残してハムレットは最後の一言を伝える。

あとは沈黙　（The rest is silence.）

長文の独白にもまして、僅か5音節の短文が多くを物語るのである。

本稿は、芝居の構造と台詞の機能を説明するために構想したものであった。シェイクスピアの独白を配列し、繋ぐことによって、その目的を達成しようと試みたものであるが、果たしてその狙いが奏功したか否か、それは読者の判断に委ねるばかりである。

注

1. 大山俊一訳『リチャード三世』旺文社文庫　昭和49. pp. 7−10
2. 大山敏子訳『ジュリアス・シーザー』旺文社文庫　昭和43. p. 35
3. ‘Were I the Moor, I would not be Iago.’（*Othello*, Ⅰ. i. 56）
   Cf. 拙著『シェイクスピアーガルキャッチャーの系譜』朝日出版社　平成12. pp. 273−4
4. 小田島雄志訳『ハムレット』シェイクスピア全集Ⅰ　白水社　昭和48. p. 258
5. 河合祥一郎『謎解き「ハムレット」−名作のあかし』三陸書房　平成12. pp. 96−7
6. この部分に関しては、小田島雄志の翻訳受容論および河合祥一郎の見解に示唆を得た。
7. 安西徹雄『シェイクスピアの名台詞』講談社学術文庫　昭和61. pp. 179〜81
8. 作品が上演された当時でも、亡夫の弟との結婚は法的には妥当とされていたが、モラルの上では近親相姦と見なされていた。
9. この訳語については少し説明が要るであろう。従来はFrailtyを「弱きもの」と訳出した。この訳語には「かよわきもの＝女性」のイメージが強い。しかし、英語のFrailtyには「操の観念の脆いこと」が含まれている。それ故に「身体の弱きもの」ではなくて、「心の弱きもの」すなわち「(操の）脆きもの」に落ちつくのである。
10. 安西徹雄　*op. cit.*, pp. 184−6
11. *ibid.*, p. 197
12. *ibid.*, pp. 197−8
13. 福田恆存『ハムレット』シェイクスピア全集10　新潮社　昭和34. p. 187